

英国大使館 2016年6月29日

Opening Remarks by Prof Kiyoshi Kurokawa

人類の歴史は、飢えと病原菌との闘いの歴史でした。近代西洋医学は、200年前のジェンナーによる種痘に始まり、ロンドンのコレラ発生を契機とした公衆衛生の理解と対策、病原菌・ウイルスの同定、ワクチンの開発、フレミングによるペニシリンの発見、ワックスマンによる結核菌に対する初めての薬「ストレプトマイシン」の発見などがありました。1950年ごろまで、結核は日本の第一の死因でした。

1964年の東京オリンピックの4年前の1960年には、小児麻痺ポリオが蔓延しており、日本でも新たに5000人をこえる麻痺の患者さんが出ています。しかし、その数年前に米国で発見されたポリオへのワクチンが日本にも導入され、その後の20年で日本から小児麻痺は消滅しました。しかし、不幸なことにいまだにポリオのワクチンがいきわたっていないところがあるのです。2年前にナイジェリアで消滅、残るのはパキスタンとアフガニスタンです。

今では、世界の半分の人が都市に住み、しかも地球のほとんどのところに30時間程度で移動できるグローバリゼーションの世の中になりました。多くの抗生物質とともに、細菌も生存競争の結果として、耐性菌が出てきており、大きな社会問題になりつつあります。

例えば、去年のことですが、渋谷警察署に拘留された人が結核にかかっており、数人の警官が結核に感染しました。さらに、その患者さんが死亡、東京大学で病理解剖が行われましたが、関わった数人の医師たちも結核にかかりました。いまの時代、結核菌に対する効く薬は、ごく限られているのです。このような病原菌を持った人、蚊などが、世界から、どこへでもとんでいけるのが今の世界です。

去年のエボラ熱、また明治神宮外苑が封鎖となったデング熱のことを覚えている方も多いでしょう。これが今の世界なのです。このような病原菌を持った人、蚊などが、世界から、どこへでもとんでいけるのが今の世界です。リオのオリンピックではジカウイルスが懸念されています。2020年の東京ではどうでしょうか。

G7 サミットは1975年に始まりました。「ヘルス、健康」という言葉がサミット宣言に初めて入ったのは、日本が主催国になった1979年です。日本は2000年の沖縄・九州サミットで、HIV/AIDS、マラリア、結核に対するグローバル・ファンドの設立を提唱。2008年の洞爺湖サミットでは、保健システム強化と人間の安全保障イニシアティブ

を、さらに今年の伊勢志摩サミットでもインフルエンザ、エボラばかりでなく、多剤抵抗性病原体の問題を取り上げています。

このようなG7サミットでの日本の保健・健康に対する関心は おそらく第二次世界大戦後の、疲弊した日本での栄養と健康、そして公衆衛生に力点を置いた経験によるものであったかと思います。

世界には まだまだ多くの感染症が蔓延しており、HIV / AIDS、マラリア、結核ばかりではなく、熱帯に多くみられるいくつかの感染症があります。

3年前、日本の主要な製薬企業5社と、ゲイツ財団、さらに日本政府が50%を出資して、HIV/AIDS、マラリア、結核ばかりでなく、このような「あまり顧みられない熱帯病」に対する薬あるいはワクチンなどの開発をする、という Public- Private Partnership (「PPP」)が設立されました。これが、Hitchins 大使がコメントされた GHIT、すなわち Global Health Innovation Technology ファンド です。100億円の基金で、多くの新薬、ワクチンのシードの発見、開発について、現在まで約60億円の投資がされています。

英国の Wellcome Trust、またRoche中外、GSK をはじめとする 問題を共有する多くの国内外の企業が参加されています。この3年間の GHIT Fund のインパクトを認識して、先日の G7 サミットでも、日本政府は次の5年間への拡大出資を決定しました。

このような ユニークなグローバル「PPP」が 日本から出たことは画期的なことと思います。

医学分野には、世界的ないくつかの賞がありますが、そのうちの3つの大きなものは、ガーデナー Gairdner 賞、ラスカー Lasker 賞、ノーベル Nobel 賞です。ラスカー賞は、20 年前からパブリック・サービスというカテゴリーの賞を作り、ゲイツ財団など、不定期に表彰しております。ガーデナー賞も 2009 年から「グローバル・ヘルス」という賞を新しく作り、素晴らしい受賞者の方々を表彰しています。

さらにタイでは、20 数年前にプリンス・マヒドン賞というグローバル・ヘルスの賞を作っています。

日本でも 1993 年に始まり、5 年ごとに開催されるアフリカ各国首脳をお招きした TICAD Tokyo International Conference on African Development 東京アフリカ開発会議があります。このTICADに合わせて、2008年から、野口英世 Hideo Noguchi

Africa Prize賞が始まりました。2008年、2013年、アフリカの医学に貢献された方たちとして、Brian Greenwood 博士、Peter Piot 博士、ともに London School of Hygiene and Tropical Medicine の方であり、またアフリカの保健に貢献された ケニアの Miriam Were 博士、ウガンダの Alex Coutinho 博士が受賞されています。

今年は、8月終わりにナイロビで、TICAD が初めてアフリカで開催されます。野口英世アフリカ賞と、先ほど紹介した GHIT ファンドが共同して アフリカのパブリック・ヘルスの若いリーダーたちと共に 一日の会議を開催する予定にしています。この野口英世アフリカ賞の受賞者3人、Greenwood 博士、Were 博士、Coutinho 博士が集まり、アフリカの保健衛生に活躍する若者たちをお招きする予定です。もちろん私も参加いたします。

去年12月に開催された医学分野のノーベル賞では、大村智博士とW. キャンベル博士が、アフリカや南米で多くみられる River Blindness (onchocerciasis、寄生虫による) にたいして、1億人以上を救っている薬「イベルメクチン」の発見と開発の貢献について、そして、中国のユーユー・トゥー博士が、マラリアの現在の基本治療薬、アルテシニン Artemisinin の発見で受賞しました。グローバル・ヘルスは大きな世界的なイシューだ、という「Nobel委員会のメッセージ」です。

おわりに

今日 ご来場の皆さまと G7 サミットでの日本のこれまでの保健・健康の主張の歴史を振り返りつつ、極めて不安定なグローバル化のありさまの中で、国境を超えた、多くの目には見えないリスク、つまりはサイバーセキュリティであり、CBRNE、つまりケミカル・バイオロジカル・放射能Radiation・核 Nuclear・爆薬 Explosive などとテロに加えて、「感染症・多剤耐性菌の問題など」について 議論がひろまることを大変喜んでいきます。

人類と感染症の闘いの歴史のなかで、長州ファイヴ、岩倉使節団などに始まる150年以上に渡る日本と英国の協力関係、そして、この9月に神戸で開催される 保健・厚生大臣G7サミットを踏まえて、このような議論の場を設けてくださった ヒッチنز大使、そして、旧友である GSK のモンセフ・スロウイ Moncef Slaoui 博士に感謝します。

ご参加、ご清聴 ありがとうございました。